

【子どもの観察例:アニャ】 (女児 1972年11月2日生;3歳から17ヶ月間の記録)

・1975/10/24・・アニャはプレイグループに参加し始める。最初の2週間ほどアニャがこの場に慣れるのを確かめるまで彼女の母親も一緒に付き添った。そしてミルクサークルの時間、皆どの子も椅子に坐り、ミルクを与えられるのを待っていた。アニャは突如として母親の姿が消えているのに気がついた。赤ちゃんの弟もいない。彼女は顔をくしゃくしゃに歪めて、泣き出した。まったく泣き止まない。ハリエッタが彼女を抱いて、お母さんが居ることを知らせて慰めようとしたときも、彼女は必死の形相で彼女の腕から逃れようとバタバタと暴れた。実際、彼女の母親がすぐに台所から現れた。弟の方も小脇に抱えている。そしてアニャに<おバカさんね。ママはここに居るでしょ、自分のミルクをいただきなさい・・>と言う。そこでアニャは自分の席に戻り、ミルクを飲んだ。そしてしばらくして、誰もが静けさを取り戻し、おとなしくハリエッタのお話しに耳を傾けた。

ところがこのお話しの途中、直にアニャは落ち着かなくなる。そして自分のスカートの裾を持ち上げた。彼女のお臍が丸見えとなる。それからパンツを上げ下げする。両脚を大きく広げて、性器を椅子の角に押し付け、擦り始めた。まったくそれに気を奪われている。周囲がまるで見えていないようだ。傍らのマシューはそれに好奇心をそそられずにはいられなかった。彼女の‘下半身’をじっと凝視している。そして間もなく、彼自身もまったく上の空の風情で自分のベストを引っ張った。同じくサッシャもまた落ち着かないふうにして、その真似をした。それから、私のお隣に坐っていたハイジがドレッシング・コーナーで着てきた長いスカートを私に示しながら、<ねえ、見て見て！わたしのペチコート。花柄が付いているでしょ>と何気ないふうに言う。明らかに、私の関心を彼女の‘下半身’へと向けているのは確かであった。この時点で、そこにいたどの子もアニャの様子に否応もなく注目していたのは疑いようがない。子どもらはそれぞれに妙に落ち着かない。シモーヌは鼻の穴をほじくっていた。そしてジェマもまた指しゃぶりに耽っていた。この間、皆どの子も一応おとなしくハリエッタのお話を聞いていたわけだが、誰も直接にはアニャに向って何をしてるのかとも問わないまま・・。誰もが素知らぬ顔ながら、妙に落ち着きの悪い、ある種とても緊張した雰囲気が漂っていた。ちょうど3歳になろうとしていた幼いアニャだが、一方他の子どもらは彼女より年齢は上である。だが、アニャの自慰的行為が引き金となり、どの子らもそれぞれに「自慰空想」に浸るさまが垣間見られた。その感染力は凄まじい！

・1975/11/28・・アニャが、数ヶ月ちよつと年上の男の子のジョーにどうやら惹かれたもようである。彼女は彼と一緒に付いてくるようにと誘い、一緒に新しいゲームを試みんとした。床の上のあちこちに木製の大きな積み木を置いて、それらを次々と飛び跳ねてゆく。この後、2人はスライド・ハウスの周りを一緒にぐるぐる駆け回る。アニャは愉快地思ったらしく、生き活きし始めた。一度彼女は足を置いた積み木の上からうっかり足を滑らせて床に落ちてしまった。一瞬びっくりしたような表情が顔に浮かぶ。それからすぐさま自分の性器に触る。まるでその体の部分が傷ついたのではないかと怖れたみたいにな・・。そして、この後もミルクサークルの時間に、椅子に坐りながら、彼女は尚も‘下半身’に気を奪われていた。しばしばスカートを引っ張り上げ、腰を屈めて股の間に視線を投げかけるのであった。

・1976/05/05・・・アニヤはもうこの時点ではプレイグループにうまく収まっている。自信も付いてきた様子で、やや支配的な振舞いながらも、そこそこ誰に対しても円満な態度であった。そうであっても、彼女の‘下半身’へのとらわれは依然として折々に顕著である。スカートを持ち上げて、自分の太ったお腹を誰彼に見せる。まるでなんと無邪気そのものながら・・・。

[アニヤとジョーとの間に仲良しの関係が成り立っていると認められた。彼らは2人で愉しげであった。アニヤはどちらかというジョーに対してお母さんっぽい仕草をするのである。彼女の方が3ヶ月年下であったにも関わらず・・・。3歳になったばかりだが、早くも堂々とした貫禄がなくもない。]

アニヤとジョーとは彼らだけで‘隠れ家’ごっこしていた。庭のある樹の下にちょっとしたスペースを見つけたのだ。そこが彼らの‘お家’というわけである。そこで忙しげに準備を始めた。まるで巣作りのように、葉っぱをあちこちから掻き集めて、‘お家’へと運んだ。どちらも興奮した面持ちで庭中を駆け巡った。玄関口に手洗い用にといいボウルに水を張ってあったのだが、偶然ながら、そのボウルに葉っぱを投げ込むという‘遊び’へと発展した。木々から葉っぱをむしりとり、それをボウルへと投げ込む。くすくす笑いをしながら・・・それを繰り返す。面白くてたまらないといった風だ。他の子らもたくさん加わった。そして誰もがそれに熱中した。だが彼らの誰もがそれがなんのためやら分かっているようではなかった。ただボウルの水を汚すということだけなのであった。それで私が後で新しくボウルの水を替えねばならなかったわけで・・・。[どこまで悪戯だという意識があったのか知らない。誰が仕掛け人かもわからない。付和雷同的というか、そこにはなにやら無邪気ともいえない、或る種の悪い予感がした。]

女の子たち、シモーヌ、ジェマ、ハイジ、それにアニヤが‘レディ’の装いをこらして、一緒に行進してゆく。どの子も得意げな趣きである。・・・このあとしばらくしてから、私はたまたま男の子のニールとサッシャと一緒にウエンディ・ハウスにいたのだが、ジェマがそこへ入ってきて、なんら言葉を発することもなく、食器棚の上にあった小さなプラスチックの花を引っさらってゆく。そして急いで歩み去る。それから間もなく彼女は戻ってきて、お茶の道具、カップやら皿やらを腕いっぱい抱える。そこに例の他の女の子らが押し入ってくる。それからウエンディ・ハウスのものを泥棒する。ニールとサッシャとは始め何が起きているやら事態を把握していなかったが、まずニールが気概を示した。かなり腹を立て、この事態の收拾に当たる。彼は女の子らを追い散らそうと試みた。サッシャも女の子がいなくなってからウエンディ・ハウスの裏の扉を閉めた。そして彼女らがもう入って来れないことを確めた。

ところがそれからすぐに、ウエンディ・ハウスの中にいた私も含めて3人は外からの奇襲に遭う。彼女らが再びやってきて、ハウスの裏の扉から物を投げ込んだのだ。それらは彼女らが盗んでいった台所の道具やらドレッシング・アップするための衣装などで、明らかにハウスの中を滅茶苦茶にしてやろうという魂胆である。彼女らはゲラゲラ笑い、勝ち誇って、気もふれんばかりに興奮している。ニールが再び彼女らを追い散らそうとする。アニヤは女の子らの中では一番幼いわけだが、結構意気盛んに見えた。彼女らの狼藉は、一体誰が誰を煽動してのことなのか、分からぬが・・・。

・1976/06/18・・・ウエンディ・ハウスのなかで、アニャが料理に没頭していた。男の子のティギーとパトリックがテーブルに就いて、おとなしく料理が配られるのを待っていた。男の子らはどちらもアニャよりも幼い。その彼らをアニャはよく従わせている。大した手腕だ。

アニャとジョー、それにティギーが‘隠れ家’ごっこをしている。そのお家とは木製のおおきな箱状のものが、上に穴があり、前にも穴がある。その穴は積み木で覆われ、中は暗くなっていた。居心地のいい、秘密の空間というわけである。子どもらはそこが大好きである。彼らがこうしたことにおおわらわになって熱中している間、私がたまたま近くにいたのだが、逸早くアニャがそれを察して<これはわたしたちのお家なんだからね、あっちへ行っちゃえ！>と私を牽制した。明らかに私がそれ以上、彼らに接近することを阻もうという魂胆である。決然としている。そこにシルポーというアニャよりも1歳ほど年上の男の子がたまたま居合わせていて、‘隠れ家ごっこ’に興味をもって眺めていたのだが、ここですぐさまアニャの言動を挑発とみなし、その彼らの‘隠れ家’の積み木をさっさと蹴散らし始めた。その攻撃にはかなり敵意やら嫉妬も混じっていた。普通彼が幼い子らに対してそこまでムキになることはないのだが・・・。

・1976.06.25・・・シモーヌがアニャとお喋りしている会話がたまたま漏れ聞えた。砂遊びをしている最中、シモーヌがやや唐突に、<ねえ、ニールってすてきよね>と言う。これに対してアニャもすぐさま同意する。<彼のこと、好き？私もよ！彼って私のことも、好きみたいよ！>とシモーヌが言っている。〔シモーヌはアニャよりも1歳ほど年上だが、どこか彼女を意識している。張り合っているのかな？〕

アニャはドウでケーキづくりに余念がない。私がたまたま彼女の居た辺りにいたわけだが。彼女はクッキング・トレイにそれらドウ・ケーキを並べたあと、立ち上がって<これ、オープンで焼いてくるわ・・・>と言う。そして机から離れる際、私に向って、<あんたなんかには、あげないんだから・・・>と一言決然と言い置いて、いかにもフンざまー見ろといった偉そうな趣きで、さっさとウエンディ・ハウスへと向う。

シモーヌがウエンディ・ハウスの中でお茶会を催そうと張り切っていた。彼女は大真面目であり、なんとしてでもそのお茶会を仕切るつもりでいたのだ。ところが、傍らにライバルのアニャが居た。彼女もコップに水を注いでいた。シモーヌは邪魔されたと思い怒る。<あんたはそれしちやダメなんだから・・・！>と追いかかおうとする。そのお返しに、負けてはいないアニャがシモーヌの背中をど突く。シモーヌはカンシャクを起こす。アニャを手に持った杖を振り回し、彼女を脅す。しかしながら、ここで予想外の或る事態が勃発した。そこにジョーが登場し、アニャに加担したのだ。<おまえなんか、ピクニックに入れてやらないから！>とシモーヌに告げた。しかもあれやこれやテーブルの上のままごと道具までも彼らに横盗りされてしまう。彼らはそれらを抱えて、室外へと姿を消す。そこでどうやらピクニック・パーティをやろうということらしい。仲間はずれにされたシモーヌは、<私は入れてもらえないんだあ・・・>と一人悲しげで気落ちしたようすで、ピクニック・パーティの成り行きを眺めながら、なす術もなく呆然と立ち尽くしている。〔彼らはシモーヌよりも1歳ほど年下になる。いつもの彼女なら報復しないはずはない。こんなふうに怖気づく彼女はむしろ奇妙であった。どこかシモーヌは、ジョーが自分よりもアニャを鼻負したことでショックを隠せな

いのかも知れない。アニヤが仕組んだともいえる、この面当てには悪意が漲っている。やはりシモーヌはグサツと胸と刺され、傷つくしかなかったのだろう。幼いながらもアニヤの勝ちである。]

・1976/10/22・・・アニヤとジョー、それにジェイクとが一緒になって互いに引っぱたきあうといった乱暴なゲームに興じている。本気で争っているのではないらしく、くすくす笑いをしながら・・・それでも懲りずに執拗に何度も繰り返す。その後で、アニヤが手近にあった大きな黒い帽子を被り、怪物の帽子だと言いながら、恐ろしげな声音で吼える。すっかりその気になっている。[そろそろ4歳児になろうとしているアニヤだが、ジョーやジェイクのようなほぼ同年齢の男の子らに人気があるのは、こうした覇気ゆえであろう。生一本な性格のシモーヌにはそうしたアニヤのような‘芸’がないのは確か。]

・1976/11/26・・・アニヤは、いつものように男の子らとちょっと荒っぽいゲームを喜んで一緒にやって遊んでいた。だが、意地悪だったり乱暴すぎることはない。大人の誰かが制限をすれば、彼女はそれに従う。[どことなく自信ありげで、怖気たりするところは全然ない。攻撃性を表すことに何ら躊躇するところがない。男の子らに負けてはいない。おそらく身体的に優位であるからであろうか。彼女はがっちりした体躯である。]

ピアラがマイケルとゾーイと一緒にボール遊びをしていた。彼女が全体を仕切っている。<ボールを投げるわよ。それでわたしにボールを投げて寄越すのよ>と言っている。誰もがピアラの言うとおりに従う。彼女がボールを投げ与える相手の名前を呼ぶ。順番に・・・ピアラが3人の中では年上ではあるが、3人の中でごく円満にことが運んでいるのがとてもいい。・・・そこにアニヤとジョシュアとが加わった。幼いジョシュアもこのゲームをよく理解し、ルールに従う。アニヤもである。実際彼女はピアラよりも数ヶ月上だが、このゲームに加わり、邪魔立てはしなかった。幼い年下の子らの穏やかな雰囲気珍しく溶け込んでいた。

・1976/12/10・・・アニヤはジェマやらシモーヌなど幾人かの遊び仲間がプレイグループを去ったあと、残った女の子らが年下でもあり、彼女の気質に合わないせいか、物足りないと思ったのだろう。男の子らの方によりいっそう接近した。仲間となるのは、特にジョーやらジェイクである。彼らは一緒にどちらかという乱暴な遊びに耽る傾向にあったが、アニヤは全然負けてはいなかった。それどころか、彼女は俄然優位に立ち、男の子らを堂々と従えるほどになっていった。

この日、ジョーとジェイクは取っ組み合いを始めた。[ジェイクはアニヤとほぼ同じ年齢で、ジョーが3ヶ月ほど年上になる。]その拳句にジョーがジェイクをノックアウトして床に倒した。さらに彼のからだに押し掛かり、ジェイクを何度か打ちかかった。この時点で、アニヤがジョーのお尻を引っ叩いた。何ら言葉を発せずに・・・明らかに、彼に止めろと言っている。そして実際のところ、ジョーはすぐに手を止めた。アニヤの行為になんら気を悪くしたふうでもない。つまり素直に従ったというわけだ。そして間もなく、アニヤと2人の男の子らは一緒に他のことを見つけようとして歩み去ったのである。私は驚き、眼を瞠った。

・1976/12/14・・アニャは大きな粘土の塊をナイフで小さく切り刻んでいた。そして傍らの私にく夕食を作ってるのよ。夕食にくる？>と訊ねる。しかしながら、切り刻みを終えるや、そのうちの一個を皿に載せて、ニールへと運んだ。それは彼の夕食だから、食べてよねと彼を説き伏せようと試みる。彼はなにやら自分の思うことに取り組んでおり、アニャの‘嘘っこ遊び’に色よい返事ができない。アニャの思いどおりにはお相手にはならない。それでアニャはお皿を彼のところに残したまま、彼のもとを去る。それから机に戻り、その‘お料理’の続きをやり始める。粘度の小さな塊を調理用の大皿に載せ、立ち上がり、<これをオープンに入れるわ>と言って、ウエンディ・ハウスへと向う。オープンがウエンディ・ハウスの外に放置されたままになっていた。これを彼女は中へと運び込んだ。ついでに赤ちゃんのコットやら他にもベッド類も・・。この時点で、彼女は遊び友達のエスタという連れができた。それに私をもお茶に誘った。しかしジョシュアをさっさと追い払ってしまう。<このお茶会はね、‘彼女(he)’だけが招かれるのよ、‘彼(he)’はダメよ>と告げた。そして今や自信たっぷりにホステス役となり、エスタと私にお茶を振舞う。

[女の子の彼女は、ニールに好かれたいと内心思っていたのだから、夕食を運んでやって彼の気を引きつけたのは明らか。だから色よい返事ももらえず、どうやらニールに‘袖にされた’と彼女は傷ついたのだ。それを恨みに思い、その仕返しにジョシュアに面当てしたのではなかったか。そして、男の子、つまり‘he’なんか眼じゃなくのよってところを見せたかったのだろう。彼女の私への親切な態度はいつにないこと。こうした‘同性愛’は彼女の躓いた異性愛のカモフラージュになっているのかな？！]

何がきっかけか、イアンがお腹を出して、お臍を見せびらかした。それですぐさまアニャが真似する。トーマスも。互い同士お臍の見せ合いっこになる。そして皆でケタケタと大きな声で愉快そうに笑い合う。悪戯ならば男の子も女の子もないというわけか。仲良しのつもり・・。

さらには、アニャがサイモンと共謀して、イアンの脚を伐り落とすふりをしている(自分の手がのこぎりのつもり・・)。2人とも愉快げである。[まったく陰惨極まりないことも、罪のない悪ふざけというわけだ。]

・1977/01/13・・ミルクサークルの時間、アニャはおやつに人参のステックを一個貰った。それをスカートのポケットに入れた。<今食べるのやめるわ。だってわたし、ダイエット中なんだもの。取っておくわ>と言っている。彼女のお隣に座っていたガリーという男の子が早速に彼女の真似をする。そしてズボンのポケットに入れた人参に触ってみる。アニャとジョーがこれを眺めていた。そして3人とも一緒にケタケタと笑う。[明らかに人参の形は小さなペニスに似ていた！] ジョーは、自分の分の人参は食べてしまっていたから、ポケットには何も無い。そこで何やら手持ち無沙汰を感じたか、自分の性器の辺りをズボンの上から触る。どこかしら何かに心奪われている面持ちである。[アニャのペニス羨望(envy)だとしても、なかなか芸が細かい。そこに傷つきなどは更々無い。性を笑い飛ばせる。これが彼女の強みかな？]

・1977/01/19・・木製の大きな箱の中にアニャがジョー、それにジェイクと一緒にいる。いつもの‘3人組’である。彼らの‘お城’なんだそう。自分たちの住まいにしているらしい。幾つもの積み木をその中

へ入れてある。そこでどうやら彼らがドウを食べているらしいのに、たまたま通りすがったジャッキーが眼に留め、<いけません！>と注意する。ジェイクは言うことを聞かないで食べ続ける。[大人の眼に触れる・触れないに関わらず、許されないことを敢えてやるのが愉快というのがあろう。いわゆる「反社会的」行動の前兆らしき行為かな。<いけません！>は言われなくとも分かっているはずなのだから・・・。]

庭先にある砂箱に移動し、アニヤ、ジョー、それにジェイクが砂遊びをしていた。それぞれの手に一杯ほどの砂を取り分にしていた。ところが直にお互いに他が確保している砂からちよこつとずつ横取りすることへと発展した。ゲームのつもりである。お互いに砂の量を張り合っている。次第にアニヤがジェイクに味方していることがはっきりしてきた。ジョーはこの事態にひどく傷ついた。自分の砂が横合いから2人にひっきりなしに横取りされてゆくのであるから、もはや防ぎようもないのであった。それでジョーは絶望の嘆きの声をあげ、ジェイクに手を振り上げて叩いた。アニヤは黙ったまま、何ら怖じけるふうでもなく、平然とジョーの砂をちよこつとつちよろまかしてゆく。そしてジェイクに目配せして、もっとやってやんなさいよとサインを送った。ジョーは自棄になってジェイクを叩いた。ジェイクはジョーを叩き返した。その上今やアニヤまでもジェイクに加勢し、ジョーを叩き始めた。ここに至って、もはやこの事態には耐えられぬとジョーが大泣きを始めた。そして涙にくれながら、彼はプレイ・リーダーのジャッキーに告げ口しに駆けて行った。[実に驚いた！アニヤは、彼らの‘三角関係’を巡って、自分の優位を誇示せんとしたのは明らかである。2人の男の子を敢えて対立(対決)へと煽動したのである。]

[ここでもう一つ、実に不思議であったのは、こうしたことが起きている最中、同じ砂箱で遊んでいたジェームズ存在である。彼は砂箱のほとんど半分以上の砂を自分の手に抱えていた。それで砂のお城を一人で作っていたのである。ところがそれにはアニヤも、ジョーもジェイクも何ら触ろうともしない。砂が欲しければ彼を取ればいいのに・・・。そして一方、ジェームズも彼のすぐ傍らで起きている3人組のスタモンダに何ら一切関知せずといった態度を通した。そっちはそっち、こっちはこっちというわけで、実際のところ、彼らのことは自分には一切関わりのないことを彼は承知していたふうであった。つまり、自分が立ち入ることも巻き添えをくうことでもない、それは彼らの問題(their matter)というわけだ。子どもらの互いの中にある、この見えない壁(バリアー)が興味深かった。]

アニヤの以前から見られた‘下半身’へのこだわりが、ここに至って、トイレの覗きへと発展していた。彼女はトイレに誰かが入っているのを見逃さず、必ず覗き見をする。それにジョーも加担していた。ミルクサークルの時間など、誰かがトイレにゆくと、アニヤはすぐにも立ち上がって、<わたしも、トイレよ>と言って、大急ぎでその彼(彼女)の後を追ひ、トイレへと向うのである。そしてあるとき幾人かの子どもら、アニヤも含めて、トイレの前でたむろしているのを見た。明らかに誰かのお尻を覗き見しようとしているのだ。事実そうしたことにまったくのところ頓着しない子どもがいる。例えばイアンがそうだ。アニヤよりも数ヶ月年下だけなのだが・・・。彼はトイレに入っておしっこをする際、扉を開けっ放しにする。ここでどうにかアニヤは彼のペニスをじっくり眺める機会を得た。ペニスからおしっこが出てくる様子をよくよく真面目な顔つきで凝視していた。[アニヤには弟がいる。ここに彼女の根深い「去勢不安」が見え隠れする。]

・1977/02/04・ガリーが時計を眺めて、私に〈あれ、Mr. Time だね〉と言う。そこで私が〈Mr. Time は何をするの?〉と尋ねると、そこへアニヤがすばやく割り込んで、〈時を告げるのよ Tell the time…〉と返答する。アニヤはちょっと得意げ。[showing-off(知ってるのを見せびらかす)かな。でも知的にもはっこいとしたら、それは彼女の‘武器’にもなろう。]

サイモンとエスタがウエンディ・ハウスに一緒にいる。お茶の準備をしてるらしい。サイモンがガス・レンジにやかんを掛けて、お湯を沸かそうとする。エスタはテーブルの上にお皿などを並べる。すぐにピアラとジョシュアとが加わる。そこにアニヤが登場する。無言のまま、テーブルの上に並べられてあったお皿、そしてカップ類を取り上げて、窓の外へと放り投げる。まったく他の子どもの反応など無視したままである。実際のところどの子にしろ、何が起きているのかこの事態を掌握し、かつアニヤの暴挙を阻止するには時間が掛かった。特にピアラはいかにも気圧されて、顔をきつくしかめたまま、力なくただそこに呆然と突っ立っていた。アニヤよりもたった数ヶ月年下というだけなのに。それに他の幼いエスタやらジョシュアらにも勝ち目がないのはわかるが、最年長のサイモンもこうした場合、アニヤには手も足も出ないというのが変だ。彼には気骨も才覚もない。……そしてしばらくして、アニヤがどういう脈絡もなしに、〈わたしなんて、お家に8人もの赤ちゃんがいるんだから…〉と誇らしげに宣言した。それからガリーが女の子の人形を手にしたのを一応容認したかと思うと、すぐさまそれを彼から奪い、〈わたしのよ…〉と咎めるように言う。だが、それを窓の外に放り投げたのだ。彼女はくすくす笑いをし、傍らでそれを見守っていた私がそれはよろしくないわねと言っても、彼女は無視し、まるでへっちゃらな顔をしたまま。

[ここに登場する子どもらのうち、サイモンとエスタ以外、ピアラ、ジョシュア、パトリック、ガリーなどはいつ最近プレイグループに参加してきた年下の子どもたちである。アニヤが力を誇示するにはこうした年下の子らはうってつけの相手であろう。攻撃欲がエスカレートしそうだ。おそらくお家では弟がいて、大きくなってきているだろう。アニヤはなぜか‘お姉ちゃん’にはうまくない。日頃の独りぼっちに捨て置かれている恨みがあるものか、隙あらば報復したいといった感じが強くなっている。母親の眼を盗んで弟をいじめるわけにもゆかないので、プレイグループで他の子を相手にその鬱憤晴らしをしているのかも知れない。新しくプレイグループに加わった子どもらは彼女の攻撃欲の餌食になりかねない。]

・1977/03/04・アニヤが机の上でクレヨンで何ごとか描いていたので、私が何かしらと訊く。最初知らんぷりして、まるで〈内緒だよ、あんたには言わないよ〉というふうであったが、やがてクスクス笑いをしながら、いかにも嘲りを込めて、〈あのね、手 hand と、それからお尻 bottom よ〉と言う。それからしばらくウンコ poo-poo とか何やら一人ブツブツ呟いていたが、もう用はないとばかりに、侮蔑的な物腰で席を立つ。机の上に捨て置かれた彼女の画用紙には、よくよく見ると、確かにクレヨンで彼女が左手を形どったものが大きく描かれてあり、その傍らには丸(つまり穴)があって、尻尾を付けた恰好で描かれてあった。これこそ‘手淫’の証拠ともいえた。[ほんとに親(あるいは大人)の眼を盗んで、彼女はいったいどこへ潜伏しようとするやら…。隠微というか、邪悪というか、空恐ろしいものを感じた。おそらくは秘密裏の‘糞便’による「母胎への攻撃」といったテーマの「自慰空想」なのだろうが…。]

・1977/03/25・・・アニヤがエスタと買い物袋の所有を巡って争っている。それぞれが片方ずつの取っ手を握りしめ、譲らない。エスタはアニヤよりも3ヶ月ほど幼いわけだが、やさしげで愛情深い性質の一人っ子なものだから、こうした諍いの事態は彼女にはあまりにも不慣れで、要領を得ないでまごついている。おそらくアニヤが喧嘩を売ったに違いない。エスタは私の顔を見上げて、なんとかしてくれという懇願の合図をしてみせた。私が何も行動をしなかったので、彼女は徐々に自ら防御から攻めの体勢を取り始めた。たまたま片方の手に持っていたプラスチックのピンボールでアニヤを叩いた。かなり恐ろしげな形相をして・・・。勿論アニヤはエスタを叩き返す。彼女らは互いに睨みあいを続け、買い物袋の取っ手を握りしめ、引っ張り合いを重ねた。これがしばらく続いた。エスタは真剣そのものだが、一方アニヤは余裕ある態度で、何やら面白がっているみたいだ。何しろ彼女の方が優位なのは分かっているわけだから・・・。とうとうエスタが買い物袋を手にし、そのまま逃げた。それでアニヤはさらに彼女の後を追掛けた。

・1977/03/30・・・ニールがスライド・ハウスの天辺に座り込んでいる。それは彼の‘お家’ということらしい。その‘お家’の傍らには赤ちゃん用の乳母車まで置いてある。アニヤが彼に接近してきた。何やら話をしていたが、ニールが‘パパ’で、アニヤが‘ママ’だということに話が付いた。ここでニールが乳母車の中の赤ちゃんは彼の(his)だと主張した。それを聞いて、アニヤが<それがニールの赤ちゃんなら、わたしの赤ちゃんでもあるってことでしょ？ そうじゃないの？ >と言う。しかしながらアニヤの論理がニールには今ひとつよく呑み込めず、彼は押し黙って返答をしない。・・・それからすぐのこと、アニヤの靴がニールの顔にまともにぶつかってしまう。ニールは痛みで泣き出す。アニヤは<ごめん・・・>と一応謝る。それからおそらくちょっと心配でもあったのだろう、ニールをじっと凝視していたが、ニールのシクシク泣く声が止まらないので、アニヤが彼に挑む。<パパなんだから、泣いちゃいけないでしょ・・・>と。このひと言がすぐさまニールに影響した。彼はパパとはいかなるものかを思い出したとでもいうように、つまり勇敢であれということを知る。そして泣き止んで、普通の顔に戻った。アニヤの心理操作はお見事というか、ほとほと感心した。だが、その2、3分後、ニールは再び惨めそうな泣き声をあげ始めた。私が彼の唇をよく見ると、切り傷があり、血が出ている。これじゃ痛いわけだ。そこで台所にいるジャッキーのところ連れてゆき、ニールの手当てを頼んだ。[アニヤはとんでもない‘悪妻’である！ ニールにはとんだ迷惑な話であったというのが私の感想だ。プレイグループで子ども同士が互いを傷つけあうといったことは、まったくの事故も含めて、滅多にあることではない。この場合、アニヤがニールを傷つけたのは、どうやら‘未必の故意’ではなかったか。彼女が彼に‘片思い’なのは明らか。誰かを烈しく愛しかつ所有欲を覚えたならば、その人を傷つけずにはおかないのだろうか。アニヤの深層心理(つまりは女心！)が恐ろしい！]

・1977/03/31・・・アニヤが一人で駆け回っていた。そこで床にあった木製のブロックに蹴つまずき、倒れた。このショックから立ち直ると、彼女は床に膝をついて、頭を両腕で抱え込み、いかにも悔しげに声をあげて泣いた。それからしばらくして彼女は立ち上がり、何ごともなかったことのようにケロツとした顔で普段の彼女に戻った。[ついさっきの傷ついた感情などすっかり片付けてしまったふうであった。そのあっぱれ手際の良さには感心するものの、むしろ助けを求めようとはしない彼女にどこか危ういものを覚えた。こういう事態にアニヤはいつも、母親から慰められるどころか、<バカね>と蔑まれてるのだろうか？]

サイモンとアニヤとが彼らが一緒に作った積み木の‘自動車’の中にいる。折々に彼らはそこから這い出してはいなくなり、また戻ってくる。その度に何かしらを運び込み、‘自動車’の中のどこかにそれらをこっそり隠す。彼らは‘泥棒’なんだとか。彼らが盗んだのものとは幾つかの敷物やら一個のブリーフ・ケースであったが、それらは他の‘泥棒たち’、つまりダン、ジェームズそれにニールらのもので、彼らの‘倉庫’（スライド・ハウス）に保管してあったものである。やがてこの横取りが発覚して、怒った彼らが一斉に取り戻しにやって来た。‘泥棒’のサイモンとアニヤはなんら抵抗を試みない。たぶん手向かえないと思ったのか、縮こまっている。だが、サイモンは電話をして誰かを呼ぼうとする。おそらくは警察に電話したんだろうと思われたのだが。ところが、その電話が終わったあと、彼は受話器に唾を吐きかけた。そして悪ふざけのゲタゲタ笑いをして、<唾を吐いたら、それが誰かさん person の口に入っちゃったよ>と愉快そうに言う。アニヤはそれを聞いて、同じく面白がり、サイモンと同じことをしてみる。そして2人で高笑いする。それからすぐに彼らは彼らの積み木の‘自動車’の周りをぐるぐる駆け回り始めた。私が、何してるの？と訊ねると、サイモンは<泥棒を捕まえるところなの、追っかけてるんだよ>と言うが、実際のところ彼ら2人の外には誰の姿もない。ただ狂宴 orgy の余韻を愉しんでいるかのよう。。

[サイモンは最年長だが、他の年下の男の子らに体力的にはおそらくかなわない。というか、一人っ子で‘唯我独尊’っぽい彼には闘う気骨も根性もそもそも無いのだ。体力では劣るとしても、その分彼は‘知能犯’である。彼よりもはるか年下の女の子アニヤも同類だ。いかにすれば相手に損傷を与えられるかを心得ている。つまり‘悪辣非道さ’では手慣れているわけだ。勿論それも今のところは唯‘空想レベル’であるが。。。「自慰空想」に浸ることで、恰も敵に報復したつもりで溜飲を下げているというわけだ。眼に見えない彼らの心の間には死屍累々といった印象であろうか。彼らは‘悪友’としてつるむことはあっても、真の心の友を得ることは難しいだろう。]

【補記】

アニヤは途轍もないパワーを持っている。それは邪悪 evil なる力である。その猛威は絶えざる犠牲（生け贄）を求める。他者とは餌食かおとりかのいずれかでしかない。弄ぶこと、そして傷痕を与えることにしか興味はない。そもそもが「母胎」をめぐる「自慰空想」において、‘内なる子ども inner-child’への敵愾心に起因しているものだ。その悪の威力は限りなく人から人へと感染してゆく。その集団感染が怖い。新聞紙上を賑わせ、人々を震撼させる事件、例の浅間山荘事件の集団リンチやら、オウム真理教の地下鉄サリン事件やら。。他にも、今やもはや珍しくもない、‘いじめ’やら‘虐待’といった現象。普通の家庭で、学校で、そして職場でも。。それから無差別通り魔殺傷事件やら。又あまり人には気づかれていないが、集団登校する子どもの列に車が運転ミスで突っ込んで子どもらを轢き殺すといった事故(?)などがそう。すべて「自慰空想」が外在化されたものと見做していい。もうその時点では、この内なる心の現実のそら恐ろしさを知ることは手遅れだ。おそらく悔い改めることも。。アニヤは自分の‘醜さ’にいつ気付くのだろうか。それが真に待たれてならない。 (2013/11/13 記)
